



7月26日、宮城県北部で震度6強(M6.2)を観測。6弱も2度あり、激震が3回も襲った。

日本経済新聞

421人け

連続

の家の屋根には応急処置のブルーシートが張られていました。また、家屋の解体作業(すべて自費解体)や家屋判定が始まった時期でもあったので、被害を受けた家もそのままの状態。特に一部地域に被害が集中していました。

ブロック塀は、以前発生した宮城県沖地震の教訓もあってか補強しており、以外と倒壊していませんでした。

ニュースでは、南郷町にスポットが当てられていたため被害が大きいのかわれがちなことでしたが、災害救助法が適用された南郷町、鳴瀬町、矢本町、河南町、鹿島台町の被害規模に大きな差はありませんでした。

主な活動は

センター運営を支援

南郷町での活動期間は、約10日間でした。同行した渡辺さんは、現場での作業ボランティアとして活動し、山垣さん、森本さんと自分(山下)の3人は、主にスタッフとして災害救助ボランティアセンターの運営を支援しました。滞在中は、日野町での震災復興の経験を生かし、運営な

どに関し気付いたことや培ったノウハウなどを伝えました。

シート張りの

ノウハウが生きる

すでに住民ニーズの聞き取り調査も行われていました。

平地の農村地域で高齢者人口が27パーセントを越える町だけに「稲の世話をしなければならぬが家の片付けがあつてできない」という声があり、経済的、精神的にも大きな負担がかかってくると思われま

す。今後多く声が出てくると思われるので、これからも意見を幅広く聞き取ることも必要と提言しました。また、屋根のシート張りのノウハウを伝えたと、その印刷物が南郷町で全戸配布されるという大きな反響もありました。

ボランティア体制の

整った南郷町

南郷町は他町と比べ、ボランティア救援活動がとてもしムズに進んでいました。

震災当初より、ボランティアのノウハウを持った町外、県外団体や東京災害ボランティアセンターネットワーク

などNPOを受け入れ、社会福祉協議会(以下社協)とともに「南郷町災害救援ボランティアセンター」を開設。社協職員が提言に耳を傾けられたことが良かったと思います。

他町は、社協、町災害対策本部が「自町だけの運営体制で十分」と判断。体制の考えの差が大きく、実際には、十分に住民ニーズを吸い取れない状態で、救援活動の差が出ていました。

南郷町災害救援ボランティアセンターも開設時には混乱もあつたということでしたが、到着時には分業化された運営体制のもとスムーズに救援活動が進んでいました。

支援者のつながりや

今後の問題を伝える

現地活動で感じたことは、役割分担が明確された運営面でのスムーズさ。南郷町は、災害救助に関することをNPO等の団体から社協職員を中心とするスタッフにうまく引き継がれていました。その体制づくりには、学ぶことがとても多くありました。

実際に現地に行き、事例を学びながら経験していくとい

うことはいいことだと感じました。ノウハウやマニュアルだけでなく、その地域にあつたやり方を考えていかなければならないと思います。

南郷町では、これから考えられる問題や支援者のつながりの大切さなどを伝えることができました。今後も震災後の住民ニーズなどの資料提供を続けていきます。そして、南郷町以外の町村、関係団体にも情報提供し、ネットワークを広げていきたいと思っています。

震災から3年

広がるボランティア

日野町も震災から3年が過ぎようとしています。現在ある要望も震災関係から日常生活の要望へと変わり、落ち着いてきたと感じられます。

日野ボランティアネットでは、高齢者プレゼント企画などさまざまな活動を続けています。町内でも少しずつですが、ボランティアの輪が広がってきていると思います。これからも多くの人々がボランティアをきっかけにきずなを強め、一人ひとりが支え合える明るい町になればと思います。